お茶の水幼稚園

かたらい

園長室より

ひと月にいちど時計の針が正午をまわるころ、お弁当を脇にした大学の先生方が、ひとりまたひとりと園長室の戸をたたかれる。周郷先生をかこんで、幼児教育について語り合う集いなのです。

生物学、英文学、教育学、心理学、医学、音楽等々、多彩な顔ぶれで、それぞれのお立場から自由に発言され、たいへん示唆に豊んだ興味ある問題が提供されます。そんなある日の話題を二、三お伝えすることにいたしましょう。

○**最近の出版道徳**はとても低下していると思う。書く方も用紙の割当て量をまるで無視して書いたり、署名入り原稿は執筆者が全責任を負うべきものなのに編集者が勝手に修正補足したりする。

ひとの詩を自分の著書に引用して出版後「使わせていただきました」とその本とともに一片の走り書き。何という厚顔無恥！

○**放送大学**は何のために生まれようとしているのか。市民大学としてか専門家の養成なのか。しかし放送による教育はどうしても一方的で、単なる動機づけか感覚的な把握になりやすい。真の教育はやはりマンツーマン、つまり肌の接触距離によって成果が決まるのではないだろうか。教えるということは、相手の反応を確かめながらこちらの考えもまとまりすすめられて行くものだ。大学卒業ということに何の意味があるか、というところまで考えていかねばならない問題だろう。

○**幼児教育のむずかしさ**をいつも感ずる。単純と思われるが、実は一番むずかしいものなのではないだろうか。逆に言えば本当はやさしいのかも知れないが、あまりいろいろなものが入りこんでむずかしく面倒なものにしてしまったのではないかとも思われる。

幼稚園時代に何をすれば良いか、動物の愛護や自然観察ということひとつをとってみても考えなければならないことがたくさんあるようだ。本当の意味で〝人間を豊かにする〟とか、〝科学性を育てる〟ことになるのかわからない。ここで日本人と欧州人の感覚的な違い。

○**二つの自然観**について考えてみよう。

日本人は古来農耕民族で土地と深く結びつき人間と自然は対立した関係にあるものでなく一体化したものと考える。天は恵みをもたらすものであり、自然を優

雅なものと感じてきた。

一方欧州人は遊牧民族で、動物は狩猟の対象であったし、自然も脅威に満ちたものとして存在していた。彼らは血を見ることにさほど嫌悪感をもたないようなところがあるが、こういう人種は動物に対する愛護の意味も日本人と違ってくるだろう。花も少ないからいろいろ研究して遺伝学や進化論の素地ともなった。

こうして科学は自然を冷静な目で分析し、のりこえていくべきものとして発達してきたのだと思われる。日本人のように山紫水明の世界にいるとかえって科学的な見方は伸びなくなってしまうのではないか。

自然の教育を考える時、この相反した考え方、つまり自然を対立するものとして客観的に冷たくとらえることが人間にとって必要なのか。日本人の伝統的自然観を教えることが将来人間性を育てる上に役立つのか。これをはっきりさせることがまず重要なのではなかろうか。

自然認識のしかたのうちどっちを取るかによって教育のしかたも違ってくると思う。もちろん対立概念でもってくるのは幼児教育には不向きだ。自然観察も即科学とは言えない。科学的な目を育てるのは小学校上級で良いのではないかと思う。それ以前は言葉の厳密な意味を身につけるための国語の時間を多くすべきではなかろうか。

幼児時代はあそびをくふうするとか家庭に結びついたことをやるべきで、自然に関するものは文学的に取り扱って豊かな夢を育てていきたいように思う。

○**公害問題**が非常に問題になっているけれど**自然の保護**ということを考えてみたい。これも二つの考え方があるが、何でもそのままとっておこうという立場でものを言う人があるが、これは現代では不可能だ。この狭い国土で多くの人口をかかえている日本なのだから、こうしたセンチメンタルな自然保護法ではやっていけない。

これからはいかに自然の計画的管理を進めていくかが課題になるだろう。

檻の中の動物を観察していても何にもならない。動物がつながれていることを悲しいと感ずる心を育てるためにも、自然植物園のようなスケールの大きいものを考えたいですね。たとえば一つの区を全部とか区の何パーセントかを植物で埋めるとか……。これはたいへん無理な話だけれど人間は不可能なことを可能にしてきたのだから、広い大きな立場に立ってものを考えていきたい。乗用車は全部廃止してみんなが自転車にのるとかも良いと思う。

空理空論にすぎないと言われようが、それが人間性の回復につながるならば、大いに発言しようではありませんか。

（土屋記）